

## 東北震災復興(まなびの旅)

老人クラブ会長 井上藤団

東北震災復興ツーリズムに参加しました。

女川町では地震・津波災害、復興の現況説明等を聞き、現場を案内して頂きました。ことに説明された方はまだ年も若い女性の方でしたが、説明される内容を聞きますとご本人自身、生と死の狭間にて九死に一生を得られたことや、その地域で亡くなられた方、大変な被害に遭った方々の説明を聞いている参加者の目にも涙が宿っているようで御座いました。

その日の宿は松島にて泊りました。時間も遅く暗くて外の景色は見えなかったのですが、朝起きて外の景色を見て驚きました。「松島やああ松島や松島や」の句の言葉の如く、目の前にその景色が出現したことで御座います。しばしその景色に見とれました。風呂に入ると松島の景色の向こうから朝日が昇り、その景色に大勢の皆さんのが感嘆の声を上げていました。

2日目は石巻にて見学研修で御座います。観光ボランティアの方に3.11当時の地震津波災害を色々と聞き、また現地に立って見学させて頂ますと、お話を聞く事、過ぎし日ニュースで放送された事が走馬灯の如く脳裏で交差いたしました。語り部の方はこの地域で大変な災害に遭われた事等を淡々と語られましたが、それは言語に尽くしがたいことであることがその表情から伺われました。そして、私どもが災害に対する心構えをどのように考えるか、それがこの旅の目的ではなうかと改めて思う次第であります。

今、被災地では環境問題・住宅・道路・学校・職場ありとあらゆる事に再点検している様で御座います。

やはり現地に立ってみなければ分からぬ事が沢山あります。また私達の地域の事を考えますと、この旅において見開いた事を糧として今後生かさなければならぬと思いました。

## 活動の一コマ

社会福祉協議会会長 坂口清志

7月中旬、高岡市定塚校下社会福祉協議会から講演依頼がありました。6月23日の北日本新聞に掲載された山田地域「高齢者送迎活動を充実」の記事を見ての依頼でした。あまりにも突然のことと戸惑いましたが、日頃の活動内容を理解していただく良い機会と思い講師を引き受けました。

定塚校下は高岡駅、古城公園にも近く市街中心部であって保小中学校等が建つ閑静な住宅地でした。参加者は50名余りで私に与えられた時間は45分間でした。講師は初めてのことと時計を見る余裕もなく、15分もオーバーしていましたが、私達の活動を定塚校下の皆さんにどこまで理解してもらえたかわからず、地域に合った活動を住民の皆さんに理解と協力をいただきながら行なっていることを強調してきました。

これも日頃、社会福祉協議会の役員や福祉推進員、ボランティア活動員他、住民皆様方の協力あっての成果であること感謝申し上げます。今後とも地域の福祉活動にご理解とご協力をよろしくお願いします。

赤い羽根共同募金・地域歳末たすけあい  
募金にご協力ありがとうございました

### 平成26年度実績報告

#### 赤い羽根共同募金

戸別募金	421戸	210,500円
学校募金	1件	1,946円
職域募金	2件	8,918円
イベント募金	1件	20,293円
その他の募金		1,904円
合計		243,561円



#### 地域歳末たすけあい募金

戸別募金	372戸	253,136円
------	------	----------

地域歳末たすけあい募金は、山田地域の福祉団体（赤十字奉仕団・保育所保護者会・保健推進委員会連絡協議会・児童クラブ・山田地域社会福祉協議会）に配分し、各団体において地域住民のための福祉事業を実施しました。

皆様の温かい善意に深く感謝申しあげます。

●ご寄付ありがとうございました  
谷井傳誠(小島)様 50,000円  
中澤かず子(湯瀬)様 20,000円  
寄付金は地域福祉活動に活用させていただきます

## ★編集後記★

短期間の手芸教室に通い、限られた日数では仕上がりらず、先生の家で補習授業を受けた時のことです。先生がボツリ、「家に猫9匹と犬3匹がいるんです。親猫が子供を4匹生んで、今、生後2ヶ月半の子猫の里親を探しているんですが…」とおっしゃいました。その子猫たちはいずれも器量良じで、どの子もかわいい子猫でした。以前、わが家も猫を何頭か飼っていたのですが、「猫は寿命が短いからもう動物は飼つたら駄目。」と家族から禁止令が出ていました。でも、こんなにかわいい子猫を見ると放っておけず、つい1匹の子猫を貰って帰ってしまいました。

駄目だと言っていた夫は、帰ると間もなく名前が無いからと名前をつけ、翌日には「子猫が来てから家中が明るくなった」と言っています。それは私も感じていました。いわゆる我が家は高齢者世帯、子猫1匹でこんなに変わるものかと。(編集委員 M)



平成26年度

# 山田地域 社会福祉だより

第9号

発行 平成27年3月5日

発行者：〒930-2105 富山市山田湯780 山田地域社会福祉協議会

TEL 457-2113 FAX 457-2259

## 高齢者のお出かけ支援



中村小島地区



南部地区



東部地区



川西地区



西部地区

10月24日(金) 当日は暖かくて良い天気、車に乗り中央植物園へ。ガイドさんの説明を聞いてから園内を見学。室内展示には珍しい植物や木の実がっていました。その後、昼食と買い物をして帰りました。楽しい思い出があつた。(大松茂雄・ユキ)

## 移送サービスボランティア募集中

高齢者お出かけ支援は移送ボランティアの協力により実施しました。

全地区で活動するにはまだ足りません。  
一緒に活動しませんか。

◆連絡先◆

山田地域社会福祉協議会までご連絡ください。  
TEL 457-2113 山田湯780



この広報紙は共同募金の助成金と社会福祉協議会会費などにより発行されています。

# 笑顔つなぐ地域の和 『ご愛・ふれ愛・ささえ愛』

写真でみる

一年間



**世代間交流（小枝あそび）**  
5月12日 山田児童館 木の中身抜くの難しいな

**かがやき教室（おやつ作り）**  
6月23日 山田公民館 私たちにもできたよ、簡単おやつ



**山田地域敬老会**  
10月22日 山田交流センター 園児の遊戯を観ての楽しいひと時

**配食サービス**  
年10回、ひとり暮らし高齢者20名に配食を実施



**赤い羽根共同募金活動**  
11月2日 山田公民館  
皆様ご協力有難うございました



**建具の点検修理**  
11月9日 依頼者の自宅  
これで大丈夫です



**赤十字奉仕団による宅配サービス**  
12月2日 年末恒例赤十字奉仕団員によるお弁当を  
高齢者52名へ宅配サービス



## 「女川町の震災と復興」

民生児童委員 頼 成 孝

この度、11月16日・17日の2日間にわたって山田地域社会福祉協議会の活動の一環としての「東北震災復興ツーリズム」に参加し、2011年3月11日に被災を受けた宮城県女川町、石巻市を訪問する機会を得ることができました。ここでは、16日の午後に訪問した女川町について紹介いたします。女川は宮城県の北部に位置し、今回の地震の震源地に最も近いアリス式海岸の町の一つです。地震で発生した巨大津波が町を襲い、町の中心部が海拔20mまでの高さまでほぼ水没し、その後強い引き波により多くのコンクリート製の建物が倒壊し、見る影もなく破壊された町でした。私たちが訪問したのは震災から既に3年8ヶ月も過ぎていましたが、現地を見ても復興後の姿が想像出来ない状況であり、その完成にはまだまだ長い時間がかかることを実感しました。

当日は語り部ガイドの沢辺さんにバスに乗車して頂き、被災地を案内してもらいました。

女川港は古くからさんま漁では日本有数の水揚げ量を誇っており、町の半数の住民が漁業に関わっている中で、港のほとんどの水産施設が壊滅的な被害を受けてしまいました。そこで生活再建にはまず水産施設の建設が急務であることから、今までにはない大型の多機能型水産加工施設「マスカー」が建設されました。これはカタールからの支援を受け、震災の教訓を生かし、再被災にも耐えうる設計のもとに最新の冷凍冷蔵設備を持った町の復興のシンボルとなる施設でした。

復興まちづくり情報交流館では、震災当日を撮影したVTRを見ながら、被災前後の沢辺さんの体験談をお聞きしました。そこには震災当日の生なましい光景が記録されており、改めて大津波の恐ろしさを思い起こすことになりました。

沢辺さんは石巻市在住ですが、当日は職場である女川観光協会の事務所で震災に遭われました。地震直後は大津波が来るなんて予想もせず、津波が来ることがわかった時点でも貴重品を持ち出すために引き返したり、一旦上司と共に高台に避難したにも関わらず、自分の車を取りに事務所に戻ったりと右往左往し、再び高台にたどり着いた直後に大津波が襲ってきて九死に一生を得、今から思えば怖い行動をとったものだと語っておられました。石巻市のご家族と再会されたのが震災から3日後で、ご家族全員が無事であったことを確認された時は涙が止まらなかったそうです。

今回の大震災は「千年に一回有るか無いかの出来事」かも知れませんが、昔から「天災は忘れたころにやってくる」と言われています。この視察は災害に備える構えが常に必要であることが身にしみて感じられた貴重な機会がありました。



マスカー

写真提供：女川町



倒壊したままの七十七銀行女川支店



復興まちづくり情報交流館

前主任児童委員 小塚 弘子

## 「宮城県石巻市を訪れて」

今回私は山田地域社会福祉協議会の方より声をかけて頂き、東北震災復興ツーリズムに参加して被災地の現状を見、語り部の方の貴重な話を聞くことが出来ました。

石巻市では市の観光ボランティア協会の会長である斉藤さんに案内していただき、被災地の現状の説明を受けながらバスで移動しました。斉藤さんは日頃から震災語り部をされておられ、実際被災もされている方です。石巻駅から出発し、海沿いが近くなるにつれ津波の被害が見えてきました。以前、住宅地であった場所には草が生い茂り、コンクリートの基礎も見えなくなっているためか、広大な更地となっていました。

斉藤さんによると「海沿いに門脇地区があり、海拔0m地帯に住宅・病院・学校・商店・郵便局などがあった場所は流されてしまったが、日本製紙の工場では月に1回、津波被災時の対応訓練を行っていたことにより、当時もそれが生かされ、800人の従業員は全員無事であった。

また、この地区にあった門脇小学校の校舎は壊滅的な被害を受けたにも関わらず、児童は全員避難訓練どおり背後の日和山公園へ逃げ延び、被災者は皆無であった。そして門脇小学校の校舎は震災遺構として、その一部が保存されることとなった。また、門脇地区を通る幹線道路の山側は、居住再建地区として3mの盛土を行い宅地造成計画があるにも関わらず、海側は否居住地区となるためそこにはもう住めなくなり、以前居住していた人々は今後の生活基盤としての方向が見いだせない状況である。震災の日、津波に加えプロパンガスの発火により火災が発生し多くの人が亡くなった。津波は北上川を50kmも遡上し被害を甚大にした。その結果、大川小学校は山側から予想だにしない津波が押し寄せ、子供たちが犠牲となった。被災直後、多くの小中学校が避難場所となつたが、そこまでたどり着くには時間を要し困難を極めた。」

斉藤さんは、被災体験のない私達にも被災のすごさ過酷な状況が伝わるように語られ、東日本大震災の驚異を手に取るように強く感じました。

今回改めて思ったことは、災害に対する危機意識をもち大丈夫だろうという考え方を持たないこと、日頃の訓練が大切であること、安全な場所への避難を素早く行なうことを強く実感いたしました。私たちに出来ることは多くはありませんが、被災地の早い復興を祈り一日も早く元の生活に戻れるよう願わずにはいられません。